

経過良好現在自覚的症状全くない。

4) 胸部上中部食道癌根治手術後に於ける基礎代謝及び特異力学的作用

石川 芳光

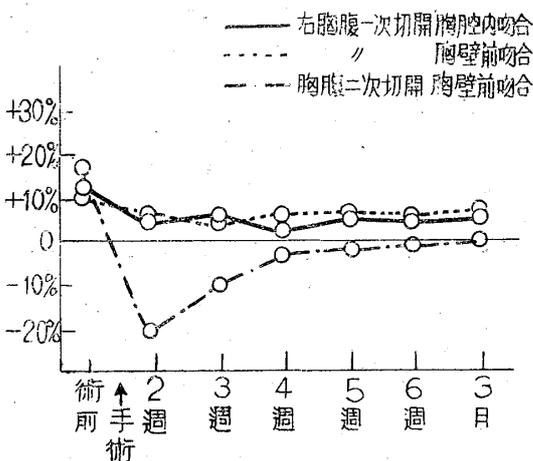
従来胸部上中部食道癌患者に対する根治手術として、教室では胸腹二次切開に依る胸壁前食道胃吻合が行われたが最近では右胸腹一次切開による胸腔内食道胃吻合、時に同じ切開に依る胸壁前食道胃吻合が行われている。

此の様な大手術に対し基礎代謝の面より経過を追及する事は手術適応決定、術後栄養法全身状態の判定等に資する処大である。

術前の基礎代謝率は稍高く呼吸商は異常高値、異常低値等多く不安定の状態である。

術後の経過は胸腔内吻合では基礎代謝率下降、呼吸商減少、体重約 5 kg の減少が認められるが 3-4 週に於て健常範囲となる。偶々来院した術後 3 月の例では呼吸商稍低く、体重も未だ術前値迄恢復せず主に食餌摂取量不足に依る低栄養状態と考えられるが基礎代謝率は正常であり栄養法の改善指導により速かな恢復が期待される。胸壁前吻合では術後 2-3 週で健常範囲となる。

胸部上中部食道癌根治手術前後の基礎代謝術後経過



蛋白質特異力学的作用を検索した処、術前は概ね異常上昇を示し出現時間は遅延し、術後 3 週で上昇度は低下するが尙出現時間は遅延している。遠隔成績に就ては今後の検討を要する。

以上結論として右胸腹一次切開による胸部上中部食道癌根治手術は術後 2-3-4 週に於て概ね基礎代謝は正常となる。旧手術法に依り検索した近藤氏の報告では恢復に 6-7 週を要するが最近の手術法で

は経過は甚だ順調である。之は手術々式の進歩、術後療法の改善によるものと思われる。一方術後殊に退院後の栄養法に就ては摂取カロリーの不足を来さない様特に留意を要する。

5) エオジン嗜好性細胞増多症を來たせる

一経験例に就て 信 国 英 一

エオジン細胞増多を來した症例は珍らしくはないが、本症例はそれが高度でその原因決定に困難を生じたものである。

患者は 24 才、既婚の女、稍無力性の体質ではあるが既往病に特筆すべきものはない。

本年 7 月末初産 7 ヶ月羊水過多症の爲人工流産後就床中廻胃部疼痛起り虫垂炎の診断の下に姑息的治療を受けたが経過良好ならず、手術を希望して 8 月中旬当院に入院。入院時血液所見は白血球 9800、エオジン細胞 6%、糞便に蛔虫卵あり、慢性虫垂炎症状あり、21 日開腹。切除せる虫垂は糞石を有するも殆ど変化なく腹腔を精査するに、腹部大動脈周囲を主として腸間膜にも拇指頭大より小なるリンパ腺多数認められ他に変化なくリンパ腺 2ヶ摘出腹腔を閉鎖した。摘出標本はエオジン細胞の浸出多く寄生虫との関係を思わせる。

爾後数回のサントニン蛔虫駆除を行い蛔虫卵(一)となつたが、廻胃部鈍痛依然として存するだけでなく臍下部にリンパ腺腫脹を触知し圧痛も強くなり、又頭重、食欲不振、悪心嘔吐等の症状一進一退し、この間化学的治療、レントゲン深部治療、ナイトロミン等リンパ腺腫脹の種々の原因に対する治療を行い、又貧血に対し輸血等を行なつたが何等効果は認められなかつた。10 月(2ヶ月目)にはエオジン細胞急に 66%を示し、更に 11 月(3ヶ月目)には最高 77%となつた。この頃に至り糞便に十二指腸虫卵の少数を発見し数回の駆虫を行うに遂次エオジン細胞は減少し 12 月末には 16%を示し虫卵も(一)となり又諸症状も軽快退院す。

6) 十二指腸潰瘍のレ線的診断の困難性と

その対策 野 上 一

昭和 21 年 1 月より同 27 年 11 月迄に教室に於て、レ線検査所見と手術所見を併せ得たる 716 例の各種胃疾患別の中率は、潰瘍例は 75%で胃癌例 92%に比し低率であり、十二指腸潰瘍例も 74%である。諸家の潰瘍的中率の比較ではほぼ中間値をとつている。又レ線検査の際十二指腸潰瘍と診断せる症例